慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リチャド・パイプス編 気賀健三・和田敏雄訳 ロシア・インテリゲンチア
Sub Title	
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.6 (1962. 6) ,p.613(85)- 614(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19620601-0086
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620601-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上はイギリス独占資本主義史研究についてのすぐれた研究である本書を読んで感じた精一杯の疑問であり、著者のいわんとするところを把握することができず、思わぬ誤解をしているかもしれない。もしそうだとすれば御寛恕を請う以外にはないが、ついでにもう一言いわせてもらうと、イギリスにおける産業独占が、他国に比しておくれたという事実はわかるけれども、それでもこれと新帝国主義とをはっきり離して論じている点が少し気になる。新帝国主義の形成の過程で、産業の独占化の傾向がみられた、あるいは並行しておこなわれた面もあったと思う。著者ものべておられるように、「新帝国主義」の性格は、「独占資本主義」の性格の外的側面にほかならないのである（一四二頁）とすれば、やはりこの両者を楯の両面としてみる努力が、今少し必要であったと思う。

なお項末なことで甚だ恐縮であるが、筆者が気のついた限りにおいて、ミス・プリントを指摘させて戴くものである。六三頁の一五行目、「数一〇〇万ポンドの金」というのも「数百万ポンドの金」とすべきであろう。また一二五頁の一一行目、「植民地民」というよりは、「植民地人」という方が一般的であると思うがどうであろうか。そのほか二一六頁の二行目、競走企業は競争企業が正しいし、二四一頁の一行目のイギリフはイギリス、二八二頁の九行目レビーはレヴィとした方がよいと思う。また二八三頁の一行目、クチンスキーは Kuzynski ではなく Kuczynski である。再版の折に改められることを期待するものである。おわりに、このユニークな研究の上に立って、筆者がさらに大きな課題、イギリス労働党の成立期の研究に邁進されんことを、同じテーマにとりくむ者として、心から希望するものである。（ミネルヴァ書房・昭和三七年二月刊・四六判・三五〇頁・五三〇円）

――一九六二・三・一一・深更――

新刊紹介

堀江正規著

『日本の労働者階級』

従来、日本の労働者階級の現状を日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴と結びつけて分析した書物はきわめて乏しかった。このことは、労働者階級の窮乏化法則が資本主義の蓄積過程からきりはなして論じられがちであったのに照応している。実際、「出稼型」のような賃労働の型、「企業別縦断的労働市場」のような労働市場の型、「年功序列賃金」のような賃金制度の型などにはめこむような分析が横行している。

その反面、日本資本主義を分析した書物は、たいてい、資本・独占資本、地主、国家権力などの面から、いわば「上から」分析したものが多く、労働者階級の状態についての分析には及ばないか、きわめて不十分な分析に終っているものが少くなかった。このことは、多くの経済学者が日本の労働者階級について全く不十分な理解しかもっていないことにもとづいている。

ところが本書は、日本資本主義の生産方法および蓄積方法の特徴にもとづいた労働者階級の状態分析であり、また、いわば「下から」の日本資本主義分析でもある。そういう意味で本書は劃期的なものであるといいうる。

著者は、「Ⅰ　労働者階級の歴史的地位」の中で、手短かに、マルクス・レーニン主義にもとづく、分析の視角を明らかにしている。そうして「Ⅱ　資本主義的生産の発展と労働者階級の物質的状態との関係」の中で、窮乏化法則とはどんなものであるかを理論的に解明した上で、「Ⅲ　日本における労働者階級の現状」で、与えられた統計資料を批判的に利用した分析の典型を示している。しかもこのような現状をもたらした日本資本主義の歴史的発展の特徴を「Ⅳ　低賃金と無権利の歴史的諸条件」の中で、要領よくまとめてから、この現状を克服しうる諸条件が成熟しつつあるにもかかわらず、日本の労働者が現状でいかにやりくりしているかを「Ⅴ　より高い生活様式のもとで、労働者階級はどう生きているのか」という章で指摘している。そうして最後に、現状を維持している戦後日本資本主義の特徴を、世界資本主義の現段階における矛盾の激化という条件のもとで、宿命論的にでなく、浮きぼりにしている。要するに、著者自身のべているように、本書の分析は、労働運動を捨象しており、それゆえ「実践の指針となりうるような具体性」をもって解決の道を示してはいないが、読みごたえのある、最近まれにみるすぐれた労働問題研究書であることはまちがいない。（岩波新書・二〇二頁・一三〇円）

―黒川俊雄―

＊　＊　＊

リチャード・パイプス編
気賀健三・和田敏雄訳

『ロシア・インテリゲンチア』

この本には、革命前のロシア・インテリゲンチアに関する論文二編と、現代のソビエト・インテリゲンチアに関するもの三編、インテリゲンチアとは何かの論文一編、計六編

が訳出されている。

各論文それぞれに持味があって示唆されることも多いが、何といっても本書中の白眉は第四論文、すなわち本書編者パイプスのものであろう。読者はまずこの論文から読むことをおすすめする。

「ロシア・インテリゲンチアの歴史的生成」と題して、パイプスは、インテリゲンチアの生成を、ロシアの西欧化過程と結びつけて理解し、西欧化に二つあることを指摘する。一つは、西欧の文化的生活様式の受容であり、他は批判的哲学的合理主義態度である。前者は政治的選択を強いることはないが、後者は一定の拘束を要求する。そして後者の批判的旧インテリゲンチアは、現状の悪の原因をすべて資本主義のせいにしていたのだが、今日では、その悪が産業生活に固有のものであることが明らかになってきた。資本主義・社会主義・共産主義のいかんを問わず、工業化は一様に著しい類似性をもち、ソ連ではすべてを犠牲にしてひたむきに産業の成長に集中してきたことから、一切の害悪をますます熾烈化することになったのだ。そこで批判的旧インテリゲンチアは戦闘的から次第に逃避的な新インテリゲンチアに変り、哲学的には共鳴できなくとも文化生活としては近代技術の発展にしたがうために自主・自律を求めるようになる。このことが全体主義傾向の中に自主的領域を拡げ、批判的インテリゲンチアの残存を可能にしていく。その点でこの体制は深刻な矛盾をはらみ、一九五六年以後のイデオロギー的動揺はその現われとみることができようとパイプスは断じている。

その他、「ドクトル・ジバゴ」の英訳者へイワードは、エレンブルグを政治に敏感な追随者とし、だからこそ、彼の小説「雪解け」はソ連知識人の動向を示しているのだと指摘している。ソルスベリー「フルシチョフのソ連」と併読すればソ連作家の圧力がひたひたと感じられよう。またカリフォルニア大学マリア教授は、インテリゲンチアという奇妙なロシア語は、「疎外された知識人」以外の何ものでもないことを明快に分析している。ロシア語インテリゲンチアを好んで使う日本の知識人は、疎外されていることをみずから知っているのでもあろうか。などなど尽きせぬ話題を提供してくれる。（時事通信社・昭和三七年三月刊・新書版・二〇〇頁・一〇〇円）

—加藤　寛—

＊　＊　＊

笠　信太郎著

『花見酒の経済』

結局は自分のあたまでしか物はかんがえられないというけれど、自分のあたまでかんがえるということは、意外にむずかしい。たいていは既成の観念に合わせたり、いわゆる世間並みの判断でごまかしてしまうことが多い。笠さんの本は、「ものの見かた・考え方」以来、案外うっかりして気がつかないでいたことを、私たちにおしえてくれる。気がつかなかったというのは知らなかったのではない。他人の目で見たり、他人のあたまでかんがえていたからそうなったのであろう。

この本の主な中味は、すでに新聞紙上でたいていの人が読んで感心したものにちがいない。土地が投機の対象であり、土地のキャピタル・ゲインが信用膨脹の起爆の役をはたしている（第一章）、というのがいちばんあたらしい問題提起だ。日本の過当競争（第二章）ということも、笠さんによって、あらためてそうかとおもい知らされたことだった。キャピタル・ゲインが物価騰貴をひきおこすことなら、だれでも知っている。過当競争とは独占的競争のことであって、「供給がふえるほど価格が上がる」という過剰能力説につながるものであることは、経済理論をすこしよけいに勉強した者なら、これも知っていることだ。だから、現実にかなった経済理論がないというのではない。正しい理論を選択できないでいたのである。

しかし、それには現実に対するすぐれた直覚が必要である。そして、すぐれた直覚は現実に対する、ある種の平衡感覚をもつことである。経済のなにがノーマルでどこがアブノーマルかを判断する基準のようなものが、あたまのなかになければならない。自分でかんがえるということは、まずこうした感覚を身につけていてできることなのだろう。いいわるいはべつとして、笠さんのものにはそうした感覚がにじみでている。ガルブレイスの「ゆたかな社会」は、読者側が当然知るべくしてあまりにも知らなすぎたと痛感したから、センセイショナルになったのであるが、これもガルブレイス教授の感覚の問題につながるのだろう。両方ともジャーナリストに縁があったことは興味ふかい。

ただし、笠さんは日本生まれの経済学出ですよと説いておられるが、笠さんの平衡感覚を信用するかぎり、中山経済学や有沢経済学は、現われないほうがよろしいのである。

（朝日新聞社・四六判・二〇八頁・二〇〇円）

—大熊一郎—

＊　＊　＊

E・H・カー著

清水幾太郎訳

『歴史とは何か』

本書は英国の現代史の大家である著者が、一九六一年の一月から三月にかけてケンブリッチ大学において行った連続講演の記録である。著者はその中で現代史の専門家にふさわしく「歴史とは何か」という本質的な問題を極めて現代的問題意識と結びつけて解明している。「歴史は現在と過去との対話である。」この言葉は本書において繰り返される著者の基本思想の一つである。そこには一方において過去の歴史をたえず現在という我々にとって最も確実な地点から考察するという極めて主体的な、かつリアリスティックな立場が示されている。と同時に他方では我々のよって立つ現在は、決して固定された、我々にとって受動的なものではなく、逆にたえず未来に向って開かれた地点であるが故に、そこにはひかえめではあるが「人間の可能性の漸次的発展」に対する信仰がもられているのである。このことを著者自身「歴史とは過去と現在との間の対話であると前の講演で申し上げたのですが、むしろ歴史とは過去の諸事件と次第に現われて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであったかと思います」と表現している。この意味で本書は単に歴史を研究するものにとってだけでなく、現在に生きるものすべてにとって極めて重要な示唆を与えてくれる。我々は著者の基本思想の中に、良い意味でのイギリスの自由主義歴史学の伝統